

造形表現に関する学生の意識

— 保育所実習・手作り楽器への取り組みを通して —

Early Childhood Education Students' Impressions of Nursery School Activities Involving the Making of Musical Instruments

(2010年3月31日受理)

近藤 信子 土谷由美子
Nobuko Kondo Yumiko Tsuchiya

Key words : 造形表現, 保育所実習, 手作り楽器, 遊び

要 約

本稿の目的は、幼児期における造形表現活動に対する学生の意識を明らかにすることである。そこで、(1) 保育所実習を終えたばかりの学生に「実習先で体験した造形活動および感想」について記述させ、その内容をもとに分析した。そこからは、「表現力を引き出す言葉かけ」「発達段階に応じた活動内容」「適した用具・材料」「興味・関心がもてる課題」「環境や雰囲気づくり」の重要性についての意識の高さがうかがえた。(2) 「手作り楽器を作る」活動に教材研究という視点から取り組み、その過程で各自が気付いたことを記述させた。記述内容は次のような8項目に分類することができた。「活動の目的に関する項目」「作例や技法に関する項目」「子どもの興味・関心に関する項目」「いろいろな素材に親しむ項目」「製作活動の楽しさに関する項目」「道具の使い方を学ぶ項目」「共同性に関する項目」「遊びを楽しむ項目」である。特に学生は、手作り楽器を使ったさまざまな遊び方に注目しており、この活動には十分な保育効果が見込まれるという認識を示した。

はじめに

幼児期における造形的な表現活動の意義については、多くの研究者や実践家により報告されている。楳(2008)は自身の著書において、「創造的な思考を促すことは、子どもたちの日々の問題解決を助けるだけでなく、将来社会のなかで生きていくうえで出会うであろうさまざまな課題を克服するのに役立つ、創造性こそが21世紀を生き延びる鍵となるというシルマッハー(R. Schirrmacher)の主張には説得力がある」としており、保育における造形表現には有益な教育的効果があると述べている。また、浅沼(1992)は、子どもが1～2歳の早い段階で行う「なぐり描き」「ぬたくり」などについて、「これは本能でもなければ条件反射でもない、単なる感情の表出とも異なるまさに原初の創造的遊びとしか言い

表しようのない絶対行為である」とし、“ものを作ったり” “描いたり” する造形的遊びは人間本来の姿を取り戻す貴重な活動であり、造形活動のように、自分の心や、頭や手を十分に働かせ何かを生み出す機会を子どもに与えることは、現在の社会状況においてこそますます重要な意味をもつであろう」と述べている。

このように幼児期は造形的な表現を必要とする特別なステージであるといえる。そのため、保育者には、子どもの思いに共感しながら造形活動を適切に援助することが求められるのである。また、これから保育者を目指す学生には、造形表現の意義をしっかりと認識しながら、子どもと共に造形活動を楽しむことができるよう豊かな感受性を育ててほしいと願っている。

本稿の目的は、保育者を目指す学生の造形表現に対する意識を明らかにすることである。学内の授業を通して、

あるいは学外実習での取り組みから、学生達は実践的な指導力を身につけていくのであるが、その過程において学生自らが感じたこと、着目したことなどを把握する必要性を感じたからである。

幼児期における造形活動に関する学生の意識からいくつかの知見を得たので報告する。

方 法

- I 保育所実習を終えた学生に「実習先で体験した造形活動および感想」について記述させ（時期は2008年7月）、その内容をもとに、学生が造形表現活動に対してどのような点に着目しているかを明らかにする。
- II 手作り楽器の製作を授業（2009年前期）の課題の一つとして取り上げた。そして、教材としてどのような効果が期待できるかを、この「手作り楽器を作る」活動を通して、学生に検討させた。

結果および考察

【方法Iについて】

本学保育学科では、2年の5月下旬から6月中旬にかけて保育所実習を行っている。学生たちは、1年次に講義や演習を通して基礎的知識や技能を学んでおり、この保育所実習での子どもとのかかわりのなかで、さらに応用力を身につけるのである。これまで学生は、ボランティアなどの体験で保育現場の状況は理解できていると思われるが、ボランティアではなく実習という評価される立場での学生の意識に焦点をあて考察したいと考えた。具体的には、子どもと取り組む造形活動から学生自らが感じたこと、着目したことなどをもとに検討した。

今回は「保育所実習で体験した造形活動および感想」というテーマで学生が書いたレポートから次の5例（原文の一部を抜粋）を取り上げ考察する。

【事例1】

実習先の園では、保育士が用意した材料などを用いて子どもたち（5歳児）が作り、それに保育士が作ったものを加え壁面にしていた。例えば、マーブリングした画

用紙を子どもたちには傘の形に切ってもらい、そこに保育士が作ったしずくや雲などを加えて壁に貼っていた。保育士の方はできるだけその魅力を伝えるために、貼る位置や押しピンで作品を傷つけないよう、さまざまな工夫や配慮をされていた。さらに参観日の日に親と一緒に作った花やカエルを壁面に加えて一つの作品に仕上げるという活動を行っており、私もお手伝いさせていただいた。親と一緒に作るということは、子どもの“やる気”を引き出させることになり、とても良い取り組みだと感じた。また、子どもたちは壁面に張られた自分や友達の作品を常に目にすることができ、そのときに感じた達成感なども思い出すのではないだろうか。

大人目から見ると、動物や花などの植物は決まりきった色しか考えられないが、子どもはさまざまな色を使うなど、それぞれとても個性的で自由な発想が見られた。保育士の方も、子どもたちがイメージを形にできるようアドバイスをされていた。そして子どもたちは作り終わったものをほめてもらうととても満足そうだった。

【事例1についての考察】

この学生は、子どもの作品を大切に扱う保育士の姿勢と子どものやる気（表現力）を引き出す一つの方法に着目している。確かに子どもにとって、自分がつくった物を大切に扱われるということは、子どもたちの気持ちも大切に扱われることであり、さらには自尊心をも育むことにつながると思われる。また、親子で協力しながら造形活動に取り組むことで、両者はイメージを共有できコミュニケーションの楽しさも感じる事ができるであろう。子どもの造形活動は物質（素材）を操作することにより、そこから一つのイメージが生まれてくるのであるが、そのイメージを促す保育者の言葉かけにも着目しており、さらにほめることで子どもの創造性は豊かになることも学んだようである。

この事例からもうかがえるが、子どもたちの参加による壁面構成には①素材や技法との出会い②自己達成感③他者理解といった保育効果が見込まれる。保育士は季節感や子どもの興味・関心に配慮したテーマを設定することが望ましい。

【事例2】

6月の行事のなかに「父の日」があり、私の担当した

クラスには、つい最近父親を亡くした子どもがいた。お父さんの絵を毎年描かせている園だったので、どうするのかと思っていたのだが、保育士さんは「お空で〇〇君のことをずっと見てくれるから、ありがとうってお父さんの絵を描こうね」と子どもに話をしていた。最初は、お父さんいないと言って泣いたり、他の子どもも「〇〇君、お父さん死んだが」などと言うかなと思ったのだが、その子は保育士さんのその言葉で、お父さんの絵を頑張っただけで描いていた。他の子どもも想像力豊かに絵を描いていた。子どもの気持ちを考えて描かせるかどうか決めることも大切だと思うけど、どのように言えば子どもが絵を描きたくなるか考えることも大切なことなのだと思強くなった。

【事例2についての考察】

つい最近、父親を亡くした子どもには、この「お父さんの絵を描く」というテーマについてはあまり関心が持てないかもしれないことを、この学生は心配していたようである。

確かに保育者の言葉かけは適切であり、子どもの心(描くという行為)を動かしたといえよう。しかし、一方でこの子どもには、大好きなお父さんを描き表したいという気持ちがすでにあったと思われる。描画は子どもの発達や心情の表れである。保育者は子どもの表したい気持ちをしっかり受け止め、子どもの表現に対して共感することこそ大切である。「表現することは相手に伝わり、わかってもらえることによる喜びで育つものである」ということを、この学生は、この体験を通して認識できたであろう。

【事例3】

私は子どもたちと一緒にペットボトルを用いた花瓶とジョロ作りに取り組んだ。暑い時期が近づいてくるので、涼しく感じるような材料を使った。5歳児だったのでペットボトルのまわりに絵を描くだけでなく、“キリ”で穴を開けるところも子どもにさせた。同じものをつくるにしても、年齢に応じてレベルを上げていくことによって楽しめたり、子どものやる気を引き出すことになると思った。

ザリガニの絵を描いていた。動くものなので、しっかり見て触って一生懸命描いていた。コンテを使っていた。

強く描いたり、やさしく描いたり、少し斜めにしてすべらしてみたりといろいろ工夫して描いていた。初めて使う道具なので、保育士が「こんな使い方もあるよ」とヒントを与えていた。子どもは少しのヒントから子ども自身で考えて用具を使いこなすことができるので、もっといろいろな用具や材料を使わせてあげることによって、さらに表現能力が上がり、自由な発想や工夫を思いつくのだと感じた。

【事例4】

実習中いろいろな造形活動に参加させていただいた。その時保育士さんに「材料を幾種類もボックスに入れて用意しておく、造形活動の時、子どもがアイデアをだしやすい」と言われた。こちらからすべて同じ材料を与えるのではなく、子どもたちに考えさせる環境づくりが必要なのだと改めて思った。

【事例3・4についての考察】

事例3の学生は、子どもの発達段階に応じた用具・材料を意識して造形活動に取り入れることの必要性を述べている。発達段階に応じた活動は子どものやる気を引き出すものであると認識しているからであろう。危険な道具に触れさせないのではなく、危険だということを知らせながら少しずつ使えるようにすることは、手のコントロール力を育てることにもなるのである。子どもの年齢によって巧緻性が異なるが、そのことを理解したうえで指導しなければならない。初めてコンテを使って描画に取り組ませたということであるが、子どもたちはコンテの性質をすぐに体得できたようである。技能は楽しい活動を、子ども自らがくり返す過程で得られるものであることもこの実習体験から学んだようである。

事例4の学生の実習園では、ラップやホイルなどの芯やペットボトルなど常にボックスに入れて、いつでも使えるよう設置されている。アイデアの具現化のためには、場や材料を提供し適切に指導することが大切であり、創造活動へ動機づけることになる一つの要因であるということも改めて認識したようである。

造形活動に用いる材料にはたくさんの種類があり、それぞれ特質が異なり、製作に適する方法が違ってくるので、保育者はそれぞれの材料の特質について知っておくことが重要である。

【事例5】

子どもが実習生の顔を見て、絵を描くという活動を観察させていただいた。4歳児の描く人の顔は肌の色・髪型をよく見ており、顔の形も個人差はあるものの、丸形をうまく描いており、肌色・黒色・赤色を使用し肌・髪の毛・口をバランスよく描いていた。鼻を描く子、描かない子もいたが、鼻を描く子はオレンジ色のクレヨンを用いて丸型の鼻を描いていた。保育士さんは「実習の先生の顔をよく見て描いてみよう」と言われただけだったが、5歳の男児は私が着ていた服も描き、服の柄など細かいところまで表現していた。4歳児は多くが顔だけを描いていたが、5歳児は全体の姿を捉えた表現ができるのだと成長の違いを感じた。

【事例5についての考察】

この学生は、表現力の年齢差について着目したようである。年齢差による描画表現の違いについては、この学生が担当した4歳・5歳以降は画面内に秩序がもたらされ、空や地面を表す基底線などが見られるようになってくる。人間にも胴体が描かれるようになり、さらに色に対する認識も強くなり、さまざまな描き方を試すようになる時期でもある。

記述にあった“よく見て描くこと”という保育者の言葉かけは、子どもに対する強い働きかけになる可能性も指摘できる。同じ年齢でも個人差が認められたという記述であるが、もっと個々の表現力の違いが描画に認められるような言葉かけが考えられたのではないだろうか。

以上の事例で明らかになったことを要約すると次のようになる。

保育所実習での造形表現活動に取り組む過程で、学生が重視したことは「表現力を引き出す言葉かけ」「発達段階に応じた活動内容」「適した用具・材料」「興味・関心がもてる課題」「環境や雰囲気づくり」である。つまり、発達段階に応じた活動であれば、適切な言葉かけにより子どもの興味や意欲は引き出され、さらに表現する力は育まれるということを実践の場で改めて学ぶことができたと思われる。また、課題の工夫、材料の工夫、環境や雰囲気づくりなど、さまざまな工夫が必要であることも、実習を通して学生に明確に意識づけられたこともうかがえる。

【方法Ⅱについて】

保育における「手作り楽器」を作る効果について、学生の意識を明らかにしたいと考え、授業の中でこの活動に取り組みさせた。教材研究という視点から、子どもの実態を踏まえた「ねらい」を明確にし、指導する上で配慮すべきことは何かについても考えながら、この活動に取り組むよう伝えた。その過程で、各自が気付いたことを自由に記述させた。その結果の概要を次に示す。

【学生数】

32名が「手作り楽器を作る」活動に取り組んだ。

【対象とした年齢】

次の幼稚園実習を想定し、幼稚園児の年齢を対象として取り組むことにした。

【使用する材料・用具】

材料は特別な物ではなく身の回りにある物とした。用具については対象年齢を考慮することとした。

【手作り楽器の種類】

()内の数値は、学生が取り組んだ楽器種類の数であるが、最も多かったのはマラカスである。

- ・マラカス (14)
- ・太鼓 (5)
- ・カスタネット (4)
- ・ギター (4)
- ・ギロ (1)
- ・笛 (2)
- ・シンバル (1)
- ・タンバリン (1)

【自由記述の内容】

提出された自由記述の内容は次に示す8項目に分類することができた。

「活動の目的に関する項目」「作例や技法に関する項目」「子どもの興味・関心に関する項目」「いろいろな素材に親しむ項目」「製作活動の楽しさに関する項目」「道具の使い方を学ぶ項目」「共同性に関する項目」「遊びを楽しむ項目」である。

分類別に考察を行い、この活動についての学生の意識について検討していく。今回は、項目ごとの出現数にはふれずに、この活動に対する学生の意識の全体を推しはかることにした。

(1) 活動の目的に関する項目

- ・楽器を手作りで作る楽しさがある
- ・音が出る面白さを味わうことができる
- ・自分で作った楽器で遊んだという満足感を得る

この活動には“作るという行為”と“音を出すという行為”の二つが含まれているが、どちらを主に取り組むのか、あるいは“作ること”と“音を出す”ことの両面に目的を置く活動とするのかは、学生によってさまざまであった。

複数の目的をもった活動は、どれを重視するかによって、保育のねらいや指導のプロセスが違ってくるため、保育者は子どもたちに投げかけたい工夫や活動の方向性を明確にしたうえで取り組むことが重要であろう。

(2) 作例や技法に関する項目

- ・手本を見せて作り方を説明する
- ・難しい箇所は保育者が手伝うようにする

完成モデルを示して、全員が取り組むという指導計画を設定した記述であるが、これは、子どもの自由度を狭めることになる可能性もあるので保育者は気を付けなければならない。しかし作例を示すことで興味・関心を高める効果もあり、技法についても、子どもに対しての一方的な指示に偏らないように注意しなければならない。

(3) 子どもの興味・関心に関する項目

- ・材料や中に入れる量によって音色が違うことに気付かせる。
- ・音の響きの違いや音のだし方の工夫に気付かせる
- ・既製楽器とは違う音色を出すことを発見させる
- ・飽きてきたときに材料の投げ合いをしないよう見守る

手作り楽器の音色の違いを気付かせることは、子どもたちの探求心を引き出すことに効果的であり、また、導入における動機付けの方法の一つとしても考えられるであろう。一方で、興味・関心がもてない活動であれば、子どもはすぐに飽きてしまうので、保育者は子どもの動向を注意深く見守ることが大切である。

(4) いろいろな素材に親しむ項目

- ・身近な材料で楽器が作れることを知る
- ・材料の特徴を知る
- ・リサイクル素材を活用できる
- ・好みの材料を選ばせる

今回の活動では、多くの学生が紙コップや牛乳パックなどの生活素材やリサイクル素材を用いていた。この理由は、実習先の保育所でこれらの素材は常にダンボールなどに設置されていることが多いためと、表現媒体としての面白さが感じられるからということであった。

材料については、その危険性を知らせることも、材料の特性を知ることにつながるという記述もみられた。それに対し保育者は、画用紙や紙皿、ペットボトルの切り口で手を切らないように注意を促さなければならない。

様々な素材に触れること、素材の特性を楽しむことで“音が出る素材”の発見へと繋がっていきと考えられる。

(5) 製作活動の楽しさに関する項目

- ・自分のイメージしたものを表現できる
- ・自分の好きな色で好きな絵を描く
- ・楽器に飾り付けをする

手作り楽器には音の良さだけでなく、視覚的な印象の良さも大切であるとしており、学生は見栄えも重視している。

子どもの多様な造形表現を保育者が受容することは、子どもの意欲を高めることになるのである。

(6) 道具の使い方を学ぶ項目

- ・ケガをしないよう気を付ける
- ・使い終わったらすぐに元の場所へ返す

危険を伴う道具については、正しい使い方を指導し、その上で安全性に配慮する目配りを怠らないようにするというのであろう。

(7) 共同性に関する項目

- ・工夫したことをみんなで伝えあう
- ・子ども同士教えあう
- ・グループ分けをして相談しながら作る

これらの項目から、子ども同士で学びあう活動になってほしいという学生の意識がみられる。また、「話す」「聴く」という態度も培われ、コミュニケーション力も高められるとしている。

(8) 遊びを楽しむ項目

- ・手作り楽器を見せ合い音の違いを知る
- ・既製楽器やピアノと合わせて演奏する
- ・歌に合わせて楽器を演奏する
- ・リズムにのって踊る

これ以外にも、さまざまな遊びのバリエーションが考

えられる活動なので、子どもと共に取り組む課題としては適切であるとする記述が多くみられた。

上記のような項目は、この活動のねらいとして掲げることができるものであり、また、これらの遊びを通して、子どもは楽しさ・面白さを感じ取ることができるであろう。

今回の「手作り楽器を作る」活動に対する最も多かった学生の意見は、この活動は“いろいろな遊びへ発展させやすい”ということにあった。このことを保育における「手作り楽器」を作る効果として多くの学生が認識していた。

実際に、幼稚園実習で“紙皿のカスタネット”を作って演奏する活動を実践した、かつての学生（本学保育学科卒業生）のレポートには次のような記述（原文の一部を抜粋）がみられた。

完成した子どもが音を出して遊べるように音楽を流した。すると、自発的に子どもたちは友達同士で一列になり、行進のように歩きながらカスタネットを打って遊びだした。

この記述から指摘できることは、この遊びには“もの（造形）”“音楽”“身体”すべての表現媒体が駆使されているということと、子どもたちの自発的な活動から遊びが始まったということである。

子ども一人ひとりの自由な発想のもとに、身近にある材料で楽器を作り、音を探し、表現していくこの活動は、やがて思い思いの遊びに発展していき、創造的な体験に繋がっていくということが示された記述であろう。

おわりに

これから保育者を目指す学生は、幼児期における造形表現活動に対して、どのような認識や理解がなされているのかを検討した。

保育所実習での体験から、子どもが十分に表現活動を楽しむことができる環境設定や援助、年齢差による表現の違いなどについて理解を深めたことがうかがえた。

手作り楽器の製作では、この活動に対する具体的な指導・援助を明らかにすると共に、この活動は“いろいろな遊びへ発展させやすい”ということに最も注目してい

た。

これらの取り組みを通して、学生たちは、幼児期における造形表現活動の意義についての理解も、さらに深められたことと思われる。これからも造形活動の楽しさを実感しながら、子ども一人ひとりのよさを受動できるような実践態度を培ってもらいたい。

子どもの造形活動には、大人の表現や芸術の枠におさまりきらない自由さや豊かさがある。そのような子どもの思いに共感して造形活動を適切に援助する保育者を目指してほしいと願っている。

引用・参考文献

- 1) 槇 英子：保育をひらく造形表現，(株)萌文書林（2008）
- 2) 浅沼拓郎：子どもの造形活動と今日的課題－製作活動を通して育つもの－，中国短期大学紀要第23号（1992）
- 3) 東山 明：絵画・製作・造形あそび指導百科，ひかりのくに株式会社（2006）
- 4) ト田真一郎：活動アナリシスアプローチを用いた「作って飛ばす活動」の保育方法の提起（第1報），エデュケア第27号（2006）
- 5) 土谷由美子：保育実習に関する意欲と現状についてⅡ－学生のアンケートを中心に－，中国学園紀要第7号（2008）
- 6) 柴田礼子：子どものためのたのしい音遊び，音楽之友社（2009）